

# LEARN WITH ソフトバンク ～魔法のプロジェクト～ インクルーシブ教育 実践事例

事例の活用について

※本事例の知的財産は投稿者に留保されます、使用される際には出典として  
「LEARN WITH ソフトバンク ～魔法のプロジェクト 組織名」 を記載ください。

## ■基本情報

組織名： 守口市立よつば小学校

所在地：

※都道府県・市区町村 大阪府守口市大久保町 2 丁目 17-26

氏名： 房前 千里

投稿月日： 2026 年 2 月 16 日

■インクルーシブ対応を検討するきっかけとなった児童・生徒（※以下「対象の子ども」と略）について

対象の子どもの学齢 小・中・高 1 年 7 歳  
例：小6 12 歳 6 年 12 歳

障害種別： 知的障がい、知的障がいを伴う ASD  
高機能自閉、アスペルガー症候群 読み書き障がい  
注意欠損多動性障がい (AD/HD) 肢体不自由  
聴覚障がい 構音障がい 視覚障がい 病弱  
重度重複障がい その他 ( )

主訴 (主な困り) 読む 書く 聞く 見る 話す 記憶する 移動する  
その他 ( )

その他補足 **・ 自閉症・情緒障害学級 1 年生 6 名**

ひらがな習得に困難があり、書き写しはできるが、自分で滑らかに想起して書くことが難しい。日常的に使用する語は次第に読めるようになってきているが、読みながら理解することは難しい。

**・ 通常の学級に在籍する 6 年生児童 1 名**

学年相応の教科書を読むことはできるが、漢字を書くことに困難があり、テスト等にはひらがな表記にて回答している。

## ■対象の子どもが利用している ICT について

①利用端末（ハード） ■タブレット □PC □その他（ ）

②OS □Windows □MacOS □Chrome □Android ■ iOS □その他

③使用した ICT の機能やアプリを教えてください。複数あれば、ボックスを追加して記載してください。ネイティブアプリ（最初から搭載されているアプリ）の URL は記載不要です。

名称：Keynote

紹介 URL：

名称：ほめスタ（試行版）

紹介 URL： <https://www.tpj.co.jp/information/archives/79>

名称：MicrosoftTeams

紹介 URL： <https://apps.apple.com/jp/app/microsoft-teams/id1113153706>

名称：もじソナ（トライアル版）

紹介 URL： <https://mojisona.com/>

④上記の ICT を活用して、対象の子どもの困りをどのように軽減されたかを詳しく記載ください。

1 年生（自閉症・情緒障害学級）

1 学期：特別支援学級にて学習する際にデジタルワークシートとして使用した。当初は、教員が「Keynote」にて作成したワークシートをプリントアウトして児童が使用していた。児童が口頭にて回答したことを、モニターに投影したワークシートに教員がデジタルペンシルで書き表し、児童が見て、自分で書き写すようにした。回答欄に書く際には、児童が自分で確認できるよう回答欄の枠線に色を付けることで、色を手掛かりに書く位置を確認し、どの児童も短い単語を書き写すことができるようになった。

2 学期：夏休みを経て、どの児童も半数程度のひらがなを想起して書けるようになってきた。そこで、「Keynote」でデジタル単語帳を作成した。当初、デジタルペンシルを使用していたが、筆記スキルが十分でないことや、滑りやすく紙に書くよりも文字の形が崩れやすかった。そこで、文字入力を試みたところ、教員と同じ整ったカードが作成できると、児童は意欲的に取り組んだ。イラストを手がかりに単語を想起し、ひらがな 50 音入力で入力したり、自分の声で読み方を録音するなどし、児童が自分で何度も見たり聞いたりして確かめることのできるツールとなった。50 音入力することにより、自分の書きたい文字が 50 音配列のどこにあるか素早く探せるようになり、紙の教材よりも集中して取り組んだりする様子が見られた。また、コミュニケーションが一方向的になりがちな児童が、友だちにタブレット端末の操作を教えるなど、児童同士で教えたり、聞き合ったりするなどの相互作用が見られた。国語科で知らせたいものを見つけ、友だちに知らせる学習では当初写真を撮っていたが、翌日になぜその写真を撮ったのか、何を伝えようとしていたのか詳しく話せないことがあった。そこで、ほめスタ（試行版）を用いて自分が注目していた箇所にスタンプを押すことにした。スタンプを押すという行動を介して、何を伝えようとしていたのか、なぜそれを選んだのかエピソードを思い出すことができる児童が多かった。そこで、「Keynote」にスタンプを押してある写真を貼り、エピソードを思い出しながらメモを作成したり、短い単語を入力したりして発表し合った。できあがったメモや文はクラス内「Teams」にて共有したり、プリントアウトして校内の掲示板にも掲示したりした。

3 学期：文字入力が得意な児童にはローマ字表を見ながらローマ字入力を行ったり、紙のワークシートの方が取り組みやすい児童にはプリントを配布したりする等、児童が取り組みやすい方法を選択して学習するようになってきた。「Keynote」で作成した単語カードに録音する活動はどの児童も好んで続けている。また、通常の学級で端末を使用して学習する際にも、自分で操作し学習に参加している。

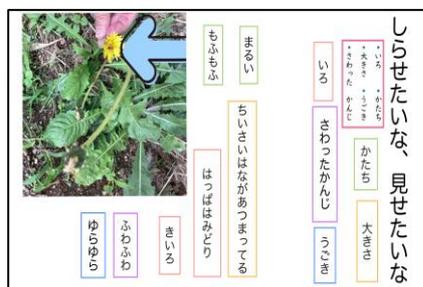


## ■ その他

参考になる写真があれば、こちらに添付してください。

※個人の写真が含まれる場合、事前に保護者の許可が得られているものに限りです。

詳細は投稿要綱をご確認ください。



## ■ 変化や効果について

### ①対象の子どもにどのような変化がありましたか

1年生：「教員と同じように操作をしてみたい」という端末を使用することへの憧れや意欲が学習へとつながった。文字学習自体はそれぞれに合ったアプリや教材を用いているが、どの子ども同じように取り組む場面を設けることで、自ずと教え合う様子が見られるようになってきた。

6年生：漢字が覚えられないのは仕方がないと思い込んでいた児童であったが、通級指導教室にてアセスメントを実施したり、アプリを使って文字入力し、漢字を使って回答したりする方法を体験したことで、中学校での学習に対する見通しが少しついた段階である。漢字の他にも苦手なことがあると話せたこともあり、静かな教室で苦手なことにも向き合える通級指導に通い始めた。

### ②対象の子ども以外の児童・生徒や、学校全体にどのような変化がありましたか

本学級は1年生が多いクラスであるが、日常的にタブレット端末を使用している様子を2、3年生が見て、自分たちもやってみたくて取り組み始めた。2名とも書字が苦手な児童であったが、メモを見ながら入力し、通常の学級の担任に提出物を自分で提出することで、友だちや担任に認められることが増えた。筆記具などを選択し、手書きで学習することを選ぶこともある。通常の学級では手書きでワークシートに書くことができた通常の学級の担任から報告を受けることも増えてきた。学習内容に合わせ、「自分が取り組みやすい方法を選択しても大丈夫である」と児童自身も理解し、取り組めるようになってきた。

本学級にて児童が取り組んだ成果物を掲示していたところ、他の支援学級担任もアプリの使い方や教材の作成方法を尋ねに来るようになった。児童に合った方法という観点を見失わないように共有していきたい。一方、一旦合理的配慮として認められた方法でも、学年や進学に伴い、新たな方法が検討されないうまにならないことが必要である。タブレット端末をどのように使うか、数ある選択肢の中から本人が自分に合う方法を選ぶことができたり、方法を見直したりできるよう教員の意識改革とシステムの構築が今後の課題である。